



丸子宿 丁子屋前にて

今日の旅は、島田宿までの、二十九 km だ。当時の旅人は一日十里(四十 km)を歩いたという。市街地を抜け安倍川橋に出る。小さな公園の中に「安倍川義夫」の大きな顕彰碑が建っている。川を泳いで渡った客人が財布を落としたのにきづいて、安倍川人足が宇津ノ谷峠まで追い掛けていって財布を返した。客人はお礼をしようとしたが受け取らない。そこで代官所へ申し出て、ほうびのお金を受け取ってもらったということである。心洗われるおもいである。橋の手前に、安倍川餅の店が立ち並ぶ、そのうちの老舗に立ち寄る。注文生産だから時間がかかること、腰をすえて一服する。その間にお客がみえたので、仲間の一人が気を利かして、そのお客の注文を先に応じ

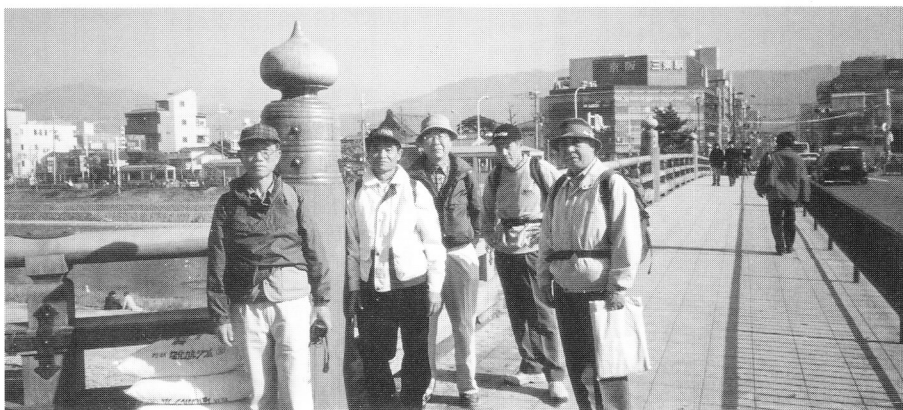
るように伝える。主人は恐縮して、茶菓のサービス、そして、金糸で五円貨を亀に仕立てた御守りを道中の安全祈願だといって頂いた。手造りである。財布を届けた美談と両両あいまって、人情に厚い静岡人気質が、そのまま生き続けているようにおもえ、気持ち良く店を後にした。十返舎一九の生まれ故郷の府中宿を後にして安倍川を渡る。ここを走って渡ったのは、四月の駿府マラソン大会であった。今日は、ゆっくり川風に押されて歩く。やがて、山が両側から迫って、ひなびた静かな里丸子宿(二十宿)に入る。本陣跡は民家の庭に記されている。とろろ汁は、芭蕉も食し、「梅若菜丸子の宿のとろろ汁」と詠んだ。丁子屋の前にこの句碑が立つ。十時三十分、とろろ汁はいつの日の楽しみとして、丸子の宿を後にして、宇津ノ谷峠に向かう。峠のふもとには軒を寄せ合う宇津ノ谷集落がある。県の推薦町並みに指定され細い街道は気持ち良く整備されている。全家に屋号があり、木札が玄関にぶらさがっている。その家の歴史を知るおもいだ。このうちの「御羽織屋」は、豊臣秀吉ゆかりの一軒である。主人の説明によると、小田原攻めに向かう途中、馬のわらじがすり減ったため、この主人に所望したところ三足しかよこさない、一足たらないという、主人は、「残りの一足は私が預かって戦勝をお祈りしております」(四は縁起が悪いため)秀吉はこれに気をよくして、着ていた陣羽織をほうびに与えたという。今も保存されている。

宇津ノ谷峠は木の根や石が露出した山越えである。その峠に、明治九年日本で二番目に開通したレンガ造りのトンネルがある。中にぼんやりとランプが灯る。疲れも忘れゆつたり歩く。一見の価値はある。峠を越えたところで、在原業平ゆかりの古道「鶯の細道」と交わる。車道に出て、少し歩くと山ありの小さな岡部宿(二十一番)に入りまもなく岡部本陣に着く。なまこ壁の土蔵が並ぶ陣内の食事処で昼食。少憩して出発。岡部の宿歩きは、お寺と仏像めぐりの渋い道中だというが、拝観する時間もなく先へ歩く。松並木街道にでる。数少ないだけに貴重な松である。それを過ぎ藤枝宿(二十二宿)に入る。長い街道は、問屋場になつていった宿場、今は商店街になつている。円型の城で知られる田中城は、家康がこの城で食べた天ぷらがもとで死亡したという話がある。(家康は一六一六年駿府城で七十四年の生涯を閉じる)長い街道を抜け十七時三十分島田宿(二十三宿)に入る。東海道一の大河「越すに越されぬ大井川」の渡し場を擁する宿場である。大名行列や、参勤交代が渡り、川留めなどで宿場におちた収入は莫大な額であり、かなり潤ったであらう。

日本橋から二〇三 km が一本の線であつた。記憶に残る今日の旅であつた。

歩くということは、人の気持ちを充実させてくれる。いろいろの人との出会い、そして、未知の土地に対する新鮮な驚き、歴史文化の知識を得る楽し

みがある。京都三条大橋まで、楽しい旅は、まだまだ続く。



完歩した喜びと達成感 京都三条大橋にて